

クリティカルケア領域で勤務する男性看護師の実態

辻本 雄大¹⁾、前田 貴彦²⁾、古川 陽介³⁾、上杉 佑也²⁾、伊藤 大輔⁴⁾

1)奈良県立医科大学附属病院、2)三重県立看護大学、3)名古屋市立大学病院、4)三重県立総合医療センター

目的

近年、男性看護師の増加にともない就業領域も拡大してる。中でも特に、クリティカルケア領域（ICUや救急外来、救命救急センター等とする）で就業する男性看護師は多い傾向が窺える。そのため、他の部署・病棟に比べ周囲の認知度も高く、男性看護師に期待されている、ME機器の管理、不穏時の対応等の頻度も多く、男性看護師としての役割が比較的明確になりやすい領域であると考えられる。今回、これらの背景を有するクリティカルケア領域で就業する男性看護師の実態を明らかにしたので報告する。

方法

対象：全国の150床以上の病院で、複数（2診療科以上）の診療科を有する1,150施設の内、本研究に協力の得られた544施設に勤務する男性看護師（准看護師を含む）8,539名。

調査方法：平成24年12月～平成25年4月に無記名の選択式一部記述式の自記式質問紙調査を実施し回収は、回答者本人による郵送法とした。

分析方法：全回答者の内、クリティカルケア領域に所属する者の回答について各項目の無回答を除き、記述統計を行った。

倫理的配慮：研究代表者が所属する施設の倫理審査会の承認を得て実施した。

結果

回答者の属性

全回答者：3,713名（回収率43.5%）

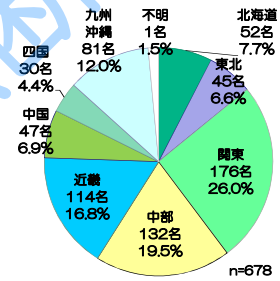
クリティカルケア領域の回答者：678名（今回の分析対象とする）

平均年齢：32.3±6.1歳（20～64歳）

平均臨床看護経験年数：9.2±5.6年目（1～40年目）

所属部署の平均男性看護師人数：5.7名

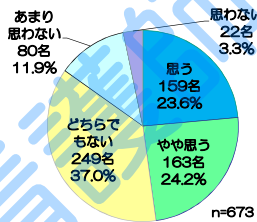
回答者の所在地：関東176名（26.0%）が最多、次いで中部132名（19.5%）



家族や患者への看護における男性看護師特有の役割

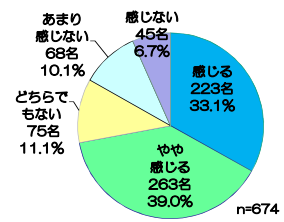
男性看護師特有の役割があると「思う」「やや思う」と回答した者は、合わせて322名（47.8%）と約半数であった。

最も多い回答は、「どちらでもない」の249名（37.0%）であった。



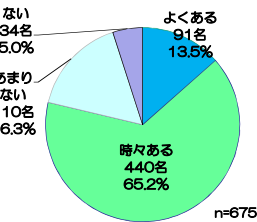
女性患者の羞恥心を伴う看護を実施する際のためらい

女性患者に羞恥心を伴う看護（処置を含む）を実施する際、ためらいを「感じる」「やや感じる」と回答した者は、合わせて486名（72.1%）であった。



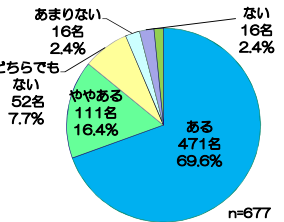
女性患者の羞恥心を伴う看護を実施する際の拒否経験

女性患者に羞恥心を伴う看護（処置を含む）を実施する際、男性看護師であるために拒否された経験について「よくある」「時々ある」と回答した者は、合わせて531名（78.7%）であった。



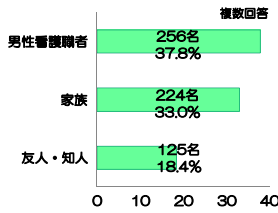
男性看護師がいることでの心強さや安心感

同じ病棟や病院に男性看護師がいることで心強さや安心感が「ある」「ややある」と回答した者は、合わせて582名（86.0%）であった。一方、同じ病棟や病院に男性看護師がいないと回答した者も11名いた。



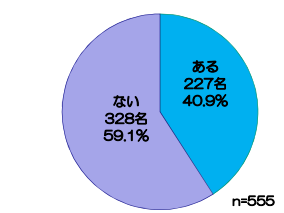
仕事に関することの相談相手

仕事に関する相談相手として、同性である男性看護職者が最も多く、次いで家族、友人・知人であった。上位3者に続いて、女性看護職者80名（11.8%）、看護管理者63名（9.3%）の順であった。



女性看護師との仕事上の関係づくりにおける苦慮経験

男性看護師であるため、病院や病棟内の女性看護師と仕事上の関係づくりにおいて、苦慮した経験が「ある」と回答した者に比べ、「ない」と回答した者の方が約20%多かった。



考察

男性看護師としての役割認識では、比較的男性看護師に期待される役割が発揮しやすい部署ではあるが、特有の役割という男性性を意識していない者の方が多い傾向が示唆された。一方、女性患者の羞恥心を伴うケアにおいては、他領域同様男性としての側面が影響していると考えられる。また、クリティカルケア領域は、他の部署・病棟よりも男性看護師数が多い部署であるため、同性がいることでの心強さや安心感はもとより、苦慮経験者が少ないとの結果からも、女性看護師の理解が得やすかったり、期待される役割が明確化しやすいことが、両者の良好な関係構築につながっているのではないかと推察する。